東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

院生が答える! 対話型模擬授業検討会Q＆A

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺,貴裕 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/152348

院生が答える！

対話型模擬授業検討会

Q&A

監修

渡辺 貴裕（東京学芸大学教職大学院准教授）

作成

池 寿瑞子　岩井 健太　河本 はるか

小泉 志信　小林 直貴　佐々木 琴美

佐藤 穂奈美　初見 駿　三塚 平

（東京学芸大学教職大学院大学院生）

【はじめに】

「院生が答える！対話型模擬授業検討会Ｑ＆Ａ」を手にとってくださりありがとうございます。私たち東京学芸大学教職大学院の 11 期生（2019 年度修了生）は、「カリキュラムデザイン・授業研究演習Ｉ～Ｖ」の授業を中心に「対話型模擬授業検討会」を学び、実践してきました。

今年度は福島大学・京都教育大学に有志メンバーを招待していただき、参加された現職の先生や院生の方々と一緒に検討会を実践する機会をいただきました（pp.13-14　参照）。その後、院生同士で振り返ると、同じ質問が多く出ていたことに気づきました。そうした問いに対して私たちの経験を言語化することが、これから実践される方々の参考になるのではないかと考え、本書の作成に至りました。執筆にあたっては、「自分のことば」で書くことを大事にしています。検討会の時と同様に、自分自身が経験してきたこと（Do）、考えたこと（Think）、感じたこと（Feel）、伝えたいこと（Want）を素直に書きました。

本書がこれから検討会を実践される方の一助となりましたら幸いです。

編集代表　小林直貴

【有志メンバー一覧】（ 氏名　校種と教科　担当箇所 ）

池 寿瑞子	小学校	Ｑ.８、デザイン
岩井 健太	中学校英語	Ｑ.２、８
河本 はるか	小学校	Ｑ.１、６
小泉 志信	小学校	Ｑ.３、５
小林 直貴	高校社会	Ｑ.７、京都教育大学コラボ概要、編集
佐々木 琴美	中学校国語	Ｑ.１、６
佐藤 穂奈美	中学校国語	Ｑ.３、４、学びの軌跡
初見 駿	高校国語	Ｑ.４、７
三塚 平	高校社会	Ｑ.２、５、福島大学コラボ概要

【目次】

はじめに ……1

目次・検討会の概要 ……2

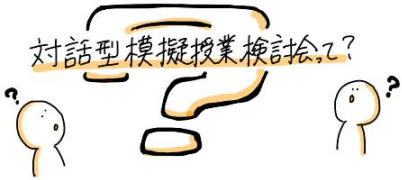
Q＆A ……3

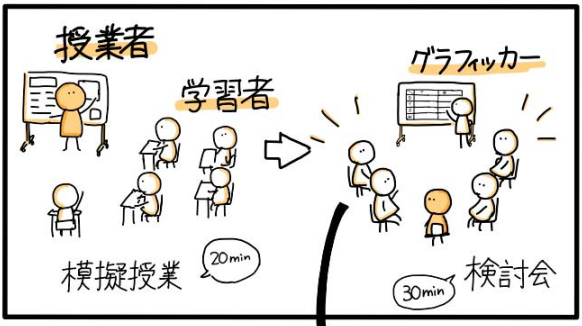
学びの軌跡 ……11

福島大学コラボ概要 ……13

京都教育大学コラボ概要 ……14

【対話型模擬授業検討会の概要】



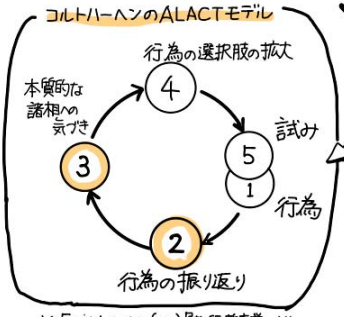


大学院の授業では、

【模擬授業 20分
対話型検討会 30分】

で、模擬授業と検討会を行います。

検討会は、授業者・学習者が混ざって車座になって行います。



※F・コルトハーヘン(2010)『教師教育学』より

検討会では、②,③を中心に話し合います。

検討会でグラフィッカーはホワイトボードに8つの問いを中心に書いています。

8つの問い

	教師	学習者
Do	教師が何を行ったか	学習者が何を行ったか
Think	教師が何を考えていたか	学習者が何を考えていたか
Feel	教師が何を感じていたか	学習者が何を感じていたか
Want	教師が何を望んでいたか	学習者が何を望んでいたか

※坂田他(2019)『リフレクション入門』より

Q．１　一般的な授業検討会と比較してどのような違いがありますか？

河本

一般的な模擬授業検討会は、全員が授業者の視点に立って話し合うことが多いかと思います。しかし、対話型模擬授業検討会では、参加者は学習者の視点に立って話をします。

そのため、雰囲気は、一般的な検討会の方がより格式張っている傾向があると思います。一般的な検討会ですと、参加者として参加する際は、一教員としてためになることを言おうと思って臨む傾向があると感じます。また、授業者側は、出された質問には自分の力で答えようと思っていることが多いのではないでしょうか。

その点、対話型模擬授業検討会はもう少しラフな場です。参加者は「楽しかった」「難しかった」といった学習者の視点で感じた純粋な気持ちをどんどん出し合います。また、誰かの出した疑問に対しては、授業者だけでなく参加者を含め全員で答えを探します。授業者自身が分からなくなってしまったことや考えが及んでいなかったことを参加者全員で考えていくことも多いです。

佐々木

大きな違いは、学習者目線か授業者目線かという「視点」にあると思っています。対話型検討会は、学習者の視点で Do・Think・Feel・Want を「発散」していきます。そのため、学習者の思考のプロセスをたどることができます。そして、授業者の授業構想段階や授業中の想いと重ねていくことで、「学習者と授業者のズレ」が見えてきます。このズレから話を進めていくと、授業者の無自覚な授業観のようなものが浮かび上がってくるのです。ただ、対話を重ねなければならないので時間がかかります。

一方で、一般的な検討会は、授業者の視点で指導技術（板書や教材の工夫など）や教材観を考え合うことができます。しかしながら、授業者や学習者の想いにフォーカスがあたるのは少ないかもしれません。

このように、得られるものがそれぞれの検討会で異なります。「何を目的としてやるのか」、それによって検討会の仕方を変えることが大切なのかもしれません。

Q．２　学習者になって考えるとはどういう感覚ですか？　特に小学校低学年の場合などイメージがつきません

三塚

僕は「小学生だったらこう考える」みたいな捉え方はしていません。僕が意識しているのは、教師が授業の中で行った働きかけや設定した課題、授業環境に対して僕がどう思ったのかということです。もちろん、小学校の授業は知っている内容がほとんどですが、あえて知らないつもりで挑みます。そうすることで新たな視点を得られたり、考えていなかったことに気づけたりする時があります。もし授業のある場面に興味を持ったら、「あそこ興味深かったんだけど、授業者としてはどういう意図だったの？」という学習者として感じたところを大切にしながら、授業者の意図を問うようにしています。その時僕が感じたものが、授業者の意図していなかったものであれば、そのズレを基に授業者の Want が見えてくることもあります。

岩井

学習者の立場に立つというよりも、「授業者目線」で授業を捉えないということを意識しています。授業者や批判者の立場に立たないイメージです。「こうしたほうがいいのになあ」などと評価するのではなく、僕自身がなるべく純粋に授業を楽しみ、味わう。そうすることで、自身のもつ既有の価値観や授業観にあまり縛られず検討会に臨むことができると感じています。

例えば、授業者の説明が分かりにくいと感じた場面があったとします。その場面について検討会で言及する際、授業者目線で模擬授業を受けている場合には、「これこれこうだから説明が分かりづらくなっている。だからこうしたほうがいいのではないか」という具合に、現象からその解決策までを一人で言及してしまいがちです。一方で、授業者目線にならないことを意識すると、「この場面分かりにくかったんだよね」というように、他の参加者と対話しやすい形で言及することができます。もし、「私もそう思った」「え、私は違った」などと意見が続けば、学習者間のズレが見えてくることもあります。

Q．３　検討会のときの椅子や机の配置にはこだわりがあるのですか？

池

京都教育大学で検討会を実践した際に、「机と一体型の椅子」に違和感を感じたメンバーがいて、普通の椅子を倉庫から出してもらうという出来事がありました。

小泉

僕は椅子の仕様や配置だけでなく空間次第で対話の質が大きく変わると思っています。２年間で、授業者の位置を変えたり、机をＴ字型にして行ったり、思い切って机の上や床にホワイトボードを置き、立ったり座ったりして話し合ったりするなど、どのような空間がよいのか試行錯誤してきました。

その経験から、検討会のときに話しやすい距離感があると感じています。例えば、席が大きく離れていたり、人と人との間に机があると、他の人と心理的な距離を感じてしまい、思ったことを言いづらくなるような気がします。ですので、検討会の時は、話しやすい距離感なのか、みんなからホワイトボードは見えるのか、みんなの顔が見えるか、椅子の仕様や配置だけでなく、その空間をどのように設定するか等を気にしています。

佐藤

距離感以外の点で私が大切だと感じているのは、自分の言葉を「場に置く」という感覚があるかどうかです。

対話型検討会では、自分の考えを素朴に出してみるという感覚が大切だと思います。そのときに、誰かに向かって話したり、受け取った側の反応が気になり過ぎたりすると、なかなか思ったことや感じたことを言い出しにくいような気がします。例えば、会議のように長机を囲んで向き合う話し合いと、半円形の車座になっての話し合いとでは話しやすさが異なるのではないでしょうか。

誰かに向かって言葉を投げてキャッチボールをしようとするのではなく、みんなで車座になって囲んでいるその空間にボールを投げ込んでみるようにすることで、「発散」が可能になってくるのではないかと考えています。

誰がどんなボールをどのようなフォームで投げ込んでもいい、そして誰がそれを受け止めてもいい。そのような、言葉を「場に置く」ことができる空間になるとよいのではないかと思います。

Q．4　「発散」ってなんですか？

三塚

「発散」は、検討会の序盤に、授業者と学習者が思ったことや考えたこと、感じたことを素直にそのまま伝えることです。「発散」は議論の種として、授業全体に対してではなく場面を絞ってしていました。例えば、「面白かった」ではなく、「授業の導入が面白かった」などです。なぜなら、みんなが同じ感情を共有していたとしても、それぞれ授業のどの場面で感じたのかは違います。「私は別のところに面白さがあった」と学習者間でのズレが見えると、授業者が大切にしていたのは何だったのかといった議論に拡げていくこともできます。また、「面白い」という言葉も人それぞれ感覚に差があります。知的好奇心を刺激されることを「面白い」と言っているのか、授業の題材が好きだからそう言っているのかで違います。「発散」を通して、授業者はどんな「面白さ」を感じてほしかったのか、それに対して学習者の実態はどうだったのかが出てきて、本質的な諸相への気づきに近づいていく手立てになると思います。

小泉

初めは何を話したらよいのかわからず戸惑いました。最初は自分が感じたことを長文で話していましたが、回数を重ねていくうちに、単語や短い文で伝えるように変わりました。例えば、「楽しかった」とか、「俺はここに疑問を持ったんだけどみんなはどうだった？」といった感じです。状況次第では長文で説明する必要もありますが、「発散」の段階で大切なことは、多くの人が意見を出すことだと思っています。

また僕は、授業者として「発散」するときに、言い訳にならないように気をつけています。授業者は検討会の時に、授業準備で考えたことやこれまでの経験を多く語りがちです。授業者が目の前の出来事以外を話してしまうと、学習者が授業者の想いや考えを推測して発言しかねません。そのため、「発散」するときは実際の授業中に授業者自身にどのような Do・Think・Feel・Want があったのかを出すことが大切だと思っています。授業者・学習者が目の前の出来事から「発散」することで、その後の議論で生きる材料になると思います。

Q．５　「８つの問い」はどのように活用していますか？　全部埋める必要はありますか？

佐藤

「８つの問い」は、「本質的な諸相への気づき」に向かうためのツールです。深めたり広げたりしながら話し合いを進めるためのツールであって、全てを埋めることが大事なわけではありません。

検討会で「発散」を繰り返すと、授業に関する様々な要素が出てきます。そこから議論を深めていく際に、散漫になっていたそれぞれの要素を繋げていくのが「８つの問い」です。はじめは単語が並んでいたなかで、共通点と相違点、授業者の Want と学習者の Feel・Think のズレなど、徐々に矢印が発生していき関係性ができてきます。すると、「授業者が目指していた学習者の姿は何か」「学習者間で感覚のズレが生まれたのはなぜか」というような論点が浮かび上がります。

また、議論のスピードがどんどん速くなっていき、「たくさん『発散』したけど、何を深めたらよいのかわからない」という状態に陥ることもあります。その際に、「８つの問い」を各々が見ながら検討会を進めると、話し合いの中で見落としていた点を再確認しながら「立ち止まって話し合う」ことができます。

初見

私たちの使い方を４つにまとめてみました。

①可視化ツール：単純にどんな発言があったのかを振り返るための機能です。

②共通点、相違点を探す：それぞれの窓の共通点、相違点を見つけ、そこから考えたことを話すために使います。

③一人ひとりの感覚から行為までの流れを探る：Want→Feel→Think→Do という流れで行動は表面化していると思うので、その流れのなかの欠けている部分に着目することで、相違点、共通点を探します。例えば、「先生が解説するのではなくて、私の意見を聞いてほしかった」という Want が出た場合、「聞いてほしかったときはどう感じていたの？」という質問をする、といった流れです。「聞いてほしかった」という Want が複数人いる時、その先の感じ方、考え方、行動には相違があることが多いので、考えを広げていくことができました。

④話し合いのブレーキ：発散に夢中になる、もしくは１つの内容に話が集中しているときに、一旦話し合いの流れを止めることで、落ち着き、深めていくモードに入ることができます。

Q．６　「本質的な諸相への気づき」はどのようなものですか？

河本

私は、今まで自分が深く意識せずにいたことや曖昧に捉えていたものに気づき、言語化していくことだと考えています。その点で、一緒に授業を振り返ってくれる人の存在が、自分だけでは気づきにくい無意識の部分や曖昧な部分へ気づかせてくれるきっかけになっています。

このようなことは口では言えますが、実際にどの段階、どの話題で「発散」から「本質的な諸相への気づき」へ進むかの判断は難しいです。はじめは私たちも探り探り進めていました。今までやってきた経験則として、「本質的な諸相」に進む際は次の２つを手掛かりにしています。

１つ目は、抽象的な言葉です。２つ目は、繰り返し登場する言葉です。例えば、「つかむ」とか「多面的・多角的」とかいった言葉です。その裏にある授業者の思いを明らかにできたり、よく聞く教育のキーワードをなんとなく使用していたことに気づけたりします。

佐々木

「本質的な諸相への気づき」と言われても、言葉だけでは正直ぱっと理解できないですが、私たちはそれをなんとなく共通した意味合いで認識しています。キーワードは、「気づき」や「意識化」「言語化」です。自分の中で無意識なことやふわふわしている曖昧なことが、はっきりと意識化されたり言語化されたりしたときが、「『本質的な諸相への気づき』だ！」となります。

そして、その段階は、抽象的だったり繰り返し登場したりする言葉に着目して話が進められているときによく実感できました。例えば、「授業者は『多面的・多角的に物事をみる力をつける』って目標にしているけど、実際に学習者は『多面的・多角的』に物事をみられたのかな？」「そもそも、『多面的・多角的』ってなに？」「授業の中で学習者のどんな姿があったら、授業者の思う『多面的・多角的』にみている状態だったのかな？」といったようなやりとりです。汎用的な概念のようなものが、自分のものとしてストンッと落ちたときに「本質的な諸相への気づき」が実感できます。

Q．7　検討会のときに思ったことを言い合うのって難しくないですか？

小林

大学の先生から、対話型では学習者・教師として Do・Think・Feel・Want をざっくばらんに出し合う（発散する）ことが大事だと繰り返し説明を受けてきました。しかし、いざ実践するとなると、最初は周囲の顔色を伺って思うように言えなかったり手探りだったりした記憶があります。２年間を通して徐々に思ったことを話せるようになりました。変化の理由には、同期との関係性と自分自身の在り方の２つの変化がありそうです。授業では検討会のメンバーが毎回変わるので、普段の大学院生活ではあまり関わらない人とも話す機会が増えていきました。ある程度関係ができると話しやすくなります。話しやすくなると、自分の思ったことや考えたことを発散しやすくなったなという感じです。そして、発散する経験を通して自分の感情に敏感になった実感はあります。けれども、関係が薄い人たちのなかでやるとなると話しやすさは変わると思います。あらためて振り返ってみると、対話型模擬授業検討会は継続的に行うことで参加者の同僚性を高める効果があるような気がします。

初見

１年生の時は難しかったです。思ったことがあっても、「この場に本当に必要な意見なのか」「この意見を場に投じたとして、話し合いはどのような流れで進むのだろうか」といったことを考えている間に、話が流れていき、話し出すタイミングを逃してしまうことがほとんどでした。今でもそのようなことはありますが、思ったことを言うことはできるようになってきました。そのきっかけは、渡辺先生の授業で取り上げられた「グループ・ジーニアス」（キース・ソーヤー）の話でした。偉人の功績は誰が作り上げたのかについて考えることから始め、最終的には、偉人一人では作り上げることはできなかった、その人が関わった多くの人達の影響があり完成したものであって、成し遂げた一人のみが特別というわけではない、というものでした。この後は、自分の意見も役に立つ可能性があるのだと納得でき、発言できるようになりました。加えて、２年間授業や飲み会などで築き上げた関係が根底にあったからこそ一歩が踏み出せたように思います。

Ｑ．８　対話型模擬授業検討会を経験してどのような変化がありましたか？

岩井

大きく分けると２つあります。１つは授業の見方が、もう１つは対話の仕方が変わったと感じています。

対話型を経験する以前や初期の頃は、学外で授業を見学する際も対話型に参加する際も、教師が選択した教育方法や授業内で起こった事象に対して、すぐに改善案ばかりを考えていました。「〇〇の方がいいのに」「自分だったらこうするのにな」といった具合です。しかし、対話型の実践を通し、徐々に改善案よりも先に「問い」が浮かぶようになりました。事象に対して、なぜそれが起こったのか、その場面で教師や生徒は何を考え、感じ、望んでいたのか、といったことが気になるようになりました。ＡＬＡＣＴモデルでいえば、２→４が減り、２→３→４が増えたと言えます（p.2 参照）。

対話の仕方も変わりました。Ｑ．６で佐々木さんが紹介しているエピソードにあるように、自分や相手が使う抽象的な言葉や概念に敏感になりました。今は自分と相手との認識の違いを前提に、より具体で考え、話をするように心がけています。

池

私は主にグラフィッカー（p.2 参照）を担当しています。もともと、話を聞いているだけでは物事を理解するのが苦手なので、自分が話を理解するためにホワイトボードを使っていました。ですので、当初は発言の内容を自分の言葉でまとめ直すイメージで利用していた感じです。

しかしあるとき、話している人のキーワードを書くことで話の流れが見えやすくなったことがありました。自分の解釈を通さずにメモした言葉で対話が深まった経験をして以来、発言者のキーワードを拾ってそのまま書くようにしています。また、言葉だけで表すことが難しそうな説明をしているときには、図や絵でその人のイメージを描くようになりました。もっとうまく表現したいと思うようになり、今ではグラレコの講座を受講したり本を読んだりしています。

自分の理解を深めるためではなく、対話が深まることを狙ってホワイトボードを使うようになったなあと思います。

学びの軌跡

大学院2年間を振り返ってみました。

M1 春学期

佐藤:「カリキュラムデザイン・授業研究演習」(以下「カリ授」) で対話型模擬授業検討会 (以下「検討会」) がスタートしたよね〜。最初は本当に意味が分からなかったなあ。笑

河本:何を話していいのかわからなくてすごく戸惑った。何が正解なのかもわからないまま、でもとにかくやってみるしかないっていう状態だったよね。

岩井:M２の先輩たちの検討会を見たり、見に来てもらったりしてコツを掴もうとしたけど、先輩たちも「自分たちのやり方を見つけてね」っていう感じで、ゴールが見えないまま走るって感覚だった。

小泉:それに授業のたびに違うメンバーで検討会をしていたから、毎回検討会の雰囲気も変わるんだよね。しばらく新鮮な気持ちが続いてた。

佐藤:次第に「カリ授」の後に自分たちで集まって「検討会の検討会」をするようになっていったよね。「検討会で何を目指しているのか」「発言を全員に求めるべきなのか」など、検討会についての院生それぞれの考えを語り合うことで、お互いの想いを知ることができたな。

岩井:あの「検討会の検討会」でいろんな考え方があることも知れたし、自分たちの発言や検討会の流れをメタ認知することができてすごく勉強になったなあ。何よりみんなの「検討会をより良いものにしたい」という気持ちがまとまっていく感じがして、あの時間結構好きだった。笑

河本:私は、「カリ授」の最初にあったフィードバックで検討会がだんだんわかってきたような気がする。渡辺先生から前回の検討会についてフィードバックをもらって、だんだん「検討会を深めるコツ」が見えてきたような気がする。

小泉:フィードバックのときに、前回の検討会で起きたことを院生同士で語る時間があって、そこで自分が参加していない検討会で起きたことを知ることができたのもよかった。

佐藤:春学期の最後の授業で、やっと「検討会を深める感覚」を体験することができた感じがする！　でも全然うまくいかない・手応えがないっていう検討会の方が断然多かった春学期だったなあ。

M1 秋学期

三塚:この頃から少しずつ「検討会を深める」という感覚や「本質的な諸相への気づき」へ向かう感覚をなんとなく掴めるようになってきたかなあ。うまくいった検討会とうまくいかなかった検討会が出てくるようになって、検討会をやっては反省をすることの繰り返しだった！

岩井:このころになってホワイトボードにも意識が向いていった感じがする。毎回ホワイトボードを書く人はやりたい人がやるって感じだったよね。大体１人１回は経験したんじゃないかな？

池:やってみると、対話に入っていくタイミングを逃したり、書くのに夢中で議論の流れに乗り切れなくなってしまったり、結構難しいんだよね。しかも、ホワイトボードを書いてもあまり活用されないこともあって、なんか立ち位置が難しいなって感じた！

三塚:たしかに、検討会中も話すことに夢中になって、あまりホワイトボードを活用できていなかった気がするな。メモをして関係性を矢印で書いてってことはできているんだけど、もっといい活用方法があるんじゃないかって感じ。

岩井:このころ「ホワイトボードを見れていない」という課題が出てきて、検討会の場をどのように作り上げていくか考えるようになったよね。結構いろんな試行錯誤をした。検討会の中身だけでなくその空間についても考えるようになってきた気がするな (Ｑ３参照)。

池:あとは、「カリ授」の一環として、違うカリキュラムの現職院生との交流会があって、現職院生に対して検討会を紹介する機会があった。自分たちがやっていることについて再度捉えなおすことができたよい機会だったなあ。

三塚:自分たちがやっている検討会を実際の学校現場に取り入れるとしたらどうするか？という視点も生まれてきたよね。紹介をしてみて、「学校現場でこれだけ時間を取って行うのは難しい」という意見や、「検討会で目指すものはとても大切だから形を変えて現場でも取り入れてみたらどうか」という意見などが出てきて、すごく勉強になった。

池:それから、この秋学期から「リフレクションサイクル実践」がスタートしたよね。検討会がなんとなくわかっていたと思ったらまた新たな課題が浮かんできた。

岩井:今までは模擬授業の検討会だったけど、今度は実際の授業の検討会だったからね。授業者がもってきた実際の授業のデータから検討するのは、また違う検討の仕方のような気がしたな。何話していいかわからない状況に陥ったこともあった。

M2 春学期

佐々木：これまで必修だった「カリ授」も、M２になると選択授業になったね。M１の秋学期からスタートした「リフレクションサイクル実践」のやり方もなんとなくわかってきて、検討会と実際の学校現場での授業とのつながりを感じられるようになってきた。

初見：M１秋学期はまだ研修も始まったばかりだったもんね。研修校にも慣れてきて、より「リフレクションサイクル実践」を回す感じがわかってきた。

小林：でも、研修校での授業が強く意識されすぎて、無難な（何にチャレンジしているのかが明確でない）授業が増えたことで、検討会そのものに難しさを感じることが増えた気がする。元々検討会はチャレンジの場としていろんな試行錯誤が行われていたはずだったんだけど。

三塚：うんうん、研修校の先生に「こういう授業して」みたいに言われると、授業者の want が見えづらくなる気がしたな。本当に自分がやりたい授業と、現場から求められている授業が合致していないと、授業者の中で矛盾が生じてしまってるんだよね。

佐々木：なるほどね～。検討会についてはどうだった？M２になると、さらに検討会の感覚を掴めるようになってきたと思うんだけど。

三塚：授業者と学習者のズレってどんな感じなのかわかった気がした。でもそこから「ズレ」を探すことに固執するようになった気もする。

初見：それにも関係して、ポジティブなリフレクションの難しさを痛感したなあ。「ズレ」を探すことに固執すると、ネガティブなところばっかりが目について、あら探しみたいになっちゃうときがあって。授業者だけでは気づけない点を挙げていくのもいいけど、良いところを挙げて価値づけしていくようなことができるといいなと思った。

小林：実際の生徒のほうが院生より既習事項を理解していることがあるっていうこともあったかな。私たちは校種も教科も関係なく毎回別々のメンバーでやっているのもあって、高校の専門性が高い内容の授業だと、実際の生徒よりも理解してないまま授業を受けてしまうことがあった。そのため授業内容についていけなくなってしまうこともあって。小学生の授業を受けるときの学習者についてはよく「無理があるんじゃないか」って話が出てくると思うんだけど、高校の場合も学習者としてどう受けるか課題があるんだなって。

佐々木：まだまだ課題は尽きないよね。考えなければならないことは目白押しだ！

福島・京都

小林：初めての外部での実演ということもあって、事前に検討会についての考え方を共有したり、検討会をやってみたりしたよね。話してみて互いの検討会に対する想いとか捉え方を共有することができてよかった。

小泉：それに「対話型模擬授業検討会」だから得られることと、「従来の検討会」だから得られることがそれぞれあるってことを、自分で考えたりみんなで再確認したりすることができたのもよかったな。外部に行く前に「従来型と対話型を対立したものとして考えたくはない」っていう思いが共有できたよね。

河本：実際に福島に行って、実演することの難しさを感じたな。ぐるっと周りから見てもらったんだけど、あの空間でやるのは緊張したよね。授業者は特に緊張したんじゃないかな。実演が終わっていろんな質問や感想を聞くことができて、現場の先生方がどのように感じたのかを直に聞くことができたのは勉強になったな。

池：福島大と違って、京教大では院生が授業者をやってくれたんだよね。学習者にも院生に何人か入ってもらった形で検討会を進めていった。

小泉：模擬授業が終わって、検討会終わりの質疑応答で「なぜ椅子にこだわったのか」ということを質問されて（Q３参照）、はじめて自分たちが空間にこだわっていたんだってことに気づいた。質問されるまでそこまで意識していなかったよね。この質問があったから、自分たちの学びを振り返る機会になった。

小林：あとは、検討会に参加した院生から「グンと話し合いが深まる感じがした。あの『ここを深めよう』という感覚は何だったのか、どうして自然とあそこを深めようとしたのか」というような声をいただいたよね。

池：たしかに、あのときは授業者の want を言語化していくことが大事なんじゃないかって感覚があった。みんなで「これについて話し合おう」って示し合わさなくても、なんとなくそこだよねってなるというか…。それこそ本当に感覚的に「本質的な諸相への気づき」に向かっていっているという感じかな。これまで検討会をやってきた経験や感覚が自分の身になってきているのかなとも思う。

河本：自分たちの感覚的な部分を外部の参加者の人に感じてもらえたのはよかったよね。福島にも京都にも言えることだけど、外部に行くことで、あらためて自分たちのこれまでやってきた検討会について振り返ることができて、とても勉強になったな。今回のリーフレットを作るきっかけにもなったし。貴重な機会をいただいき、本当にありがとうございました！

学習者目線で授業研究会を変えよう

@福島大学　2019/8/3

福島県教育委員会と福島大学主催の教員研修講座に呼んでいただきました。

現場の教職員・各市町村教育委員会指導主事の方々、福島大学の学生・院生のみなさんと、授業研究会のあり方について「対話型模擬授業検討会」をヒントに考えました。

① 教師集団の学びとリフレクション

はじめに、渡辺先生が、対話型模擬授業検討会とは何かについて、従来の検討会と比較しながら説明しました。

そもそもリフレクション（省察）とはどういうものなのか、それが教師の学びとどのように関わり、校内研修のあり方に何を示唆するのかについてお話がありました。

② 対話型模擬授業検討会の実演

次に、私たち院生によって模擬授業・対話型模擬授業検討会の実演をしました。

教材は、小学校５年生国語「注文の多い料理店」（宮澤賢治・作）。私たち院生は普段大学院でしていることと同じことをするよう心がけていました。対話型模擬授業検討会が大事にしている「いいことを言おうとしない」をまさに実践しました。

③ 対話型模擬授業検討会の体験とその発展

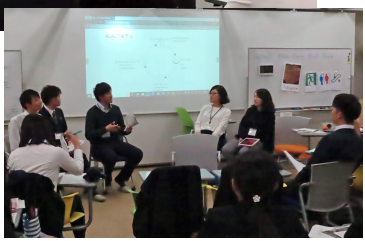
グループに分かれて、参加者の先生方に授業者をつとめてもらい、対話型模擬授業検討会を体験してもらいました。

その後、検討会やその考え方をどのように校内研修に活かすことができるか、一緒にディスカッションを行いました。最後にワールドカフェ形式で、他のグループでどのような話し合いが行われたのか交流し、深めました。

対話型模擬授業検討会に学ぶ省察のあり方

＠京都教育大学　2019/11/8

京都教育大学教職大学院の授業研究会に呼んでいただきました。「省察」をキーワードに、お互いの教職大学院での授業や実践の様子を共有し、議論を深めました。



① 対話型模擬授業検討会実演・質疑応答

最初に、京教大の院生３人と私たち７名で対話型模擬授業検討会を実践しました。京教大の江口明孝さんが授業者として、高校１年生を想定した英語の文章読解の授業をしてくれました。

検討会後の質疑応答では、多くの問いを投げかけていただき、私たちにとっても２年間の学びを振り返る貴重な機会となりました。

また、多くのメンバーが福島大学で聞かれた質問との類似性を感じ、その経験が本リーフレットをつくるきっかけとなりました。

② 院生・教員交流会の紹介

京教大の古谷京子さんが、京教大の院生・教員交流会についてスライドを用いて紹介をしてくれました。学卒院生・現職院生と大学教員とをつなぐ独自の試みから、みんなで学びをつくっている様子に刺激を受けました。

③ 京都教育大学の授業改革の紹介

京教大授業改革の様子を徳永俊太先生より紹介していただきました。お互いの大学の共通点・相違点がわかり、改めて自分たちの学びを見つめ直す機会となりました。

④ グループトーク

これまで振り返ったお互いの実践について、３～４人のグループで対話を深めました。少人数ならではの深い議論ができました。

参考文献

コルトハーヘン、フレット著、武田信子監訳『教師教育学』学文社、2010 年

坂田哲人、中田正弘、村井尚子、矢野博之、山辺恵理子『リフレクション入門』学文社、2019 年

ネットワーク編集委員会編『リフレクション大全（授業づくりネットワーク No.31）』2019 年 1 月

渡辺貴裕、岩瀬直樹「より深い省察の促進を目指す対話型模擬授業検討会を軸とした教師教育の取り組み」『日本教師教育学会年報』第 26 号、2017 年 9 月、136-146 頁

渡辺貴裕「協働的でより深い省察を伴う授業検討会に向けての話し合いの様相の変容　―教職大学院における模擬授業検討会の取り組みの事例を手がかりに―」『日本教師教育学会年報』第 28 号、2019 年 9 月、96-106 頁

渡辺貴裕『小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ　授業づくりの考え方』くろしお出版、2019 年

渡辺貴裕編『日本教師教育学会第 28 回研究大会　大会校企画②　「対話型模擬授業検討会」の実演とそれをめぐって　報告書』2019 年　※日本教師教育学会ウェブページよりダウンロード可

石川晋・山辺恵理子・渡辺貴裕『リフレクション（省察）で教師は育つ！　トークイベント記録』2019 年　※くろしお出版ウェブページよりダウンロード可

本冊子の発行に際して
東京学芸大学 Explayground ラボ応援キャンペーンよりご支援頂きました

院生が答える！　対話型模擬授業検討会Ｑ＆Ａ

発行　2020 年 2 月 11 日